

台頭する新興国 ドイツとロシア

「国家第一の下僕」を自称し、プロイセンを強国に育てる

17〜18世紀には、中央集権化の遅れていたプロイセンやロシアが、国内産業育成や領土拡大を進め、台頭した。

ユンカー(地主領主)による農場領主制が支配的だったプロイセンでは、1740年にフリードリヒ2世(大王)が即位。重商主義政策によって国内産業を育成する一方、対外的にはオーストリア・ハプスブルク家の相続問題に介入してオーストリア継承戦争を起こし、鉱工業地帯のシュレジエンを奪取した。また、ヴォルテールら啓蒙思想家を招き、「君主は国家第一の下僕」と称して、啓蒙専制君主とよばれた。

進んだ西欧を模倣しながら
ツァーリ専制を強化

1613年にミハイロロマンノフがロマノフ朝を開いたロシアでは、17世紀末にピョートル1世(大帝)が即位した。彼は西欧先進国を視察し近代化を図る一方、スウェーデンとの北方戦争に勝利して、獲得した地に新首都ペテルブルクを建設した。18世紀後半にはエカチエリーナ2世が即位。啓蒙専制君主として開明的政策を行ったが、プガチョフの農民反乱後は農奴制を強化した。

プロイセンとロシアの拡大

プロイセンの領土拡大

プロイセン王国はフリードリヒ・ヴィルヘルム1世とその息子フリードリヒ2世(大王)の治下で領土を拡大した。

1763年

フベルトゥスブルクの和約(七年戦争)

オーストリアが、宿敵だったフランスと組んでシュレジエン奪還のため七年戦争を起こすが、目的は達成できず、アーヘンの和約が再確認された。



ポーランド分割

ロシア、プロイセン、オーストリアの3国が、ポーランドを3回にわたって分割。コシュシコの抵抗運動も失敗し、1795年にポーランドは消滅した。

ウィーン会議(1815年)までのプロイセンの獲得領



中央集権化の遅れていたプロイセン(ドイツ)やロシアでも、産業の育成や軍隊の強化などで近代化が進んだ。

ロシアの領土拡大

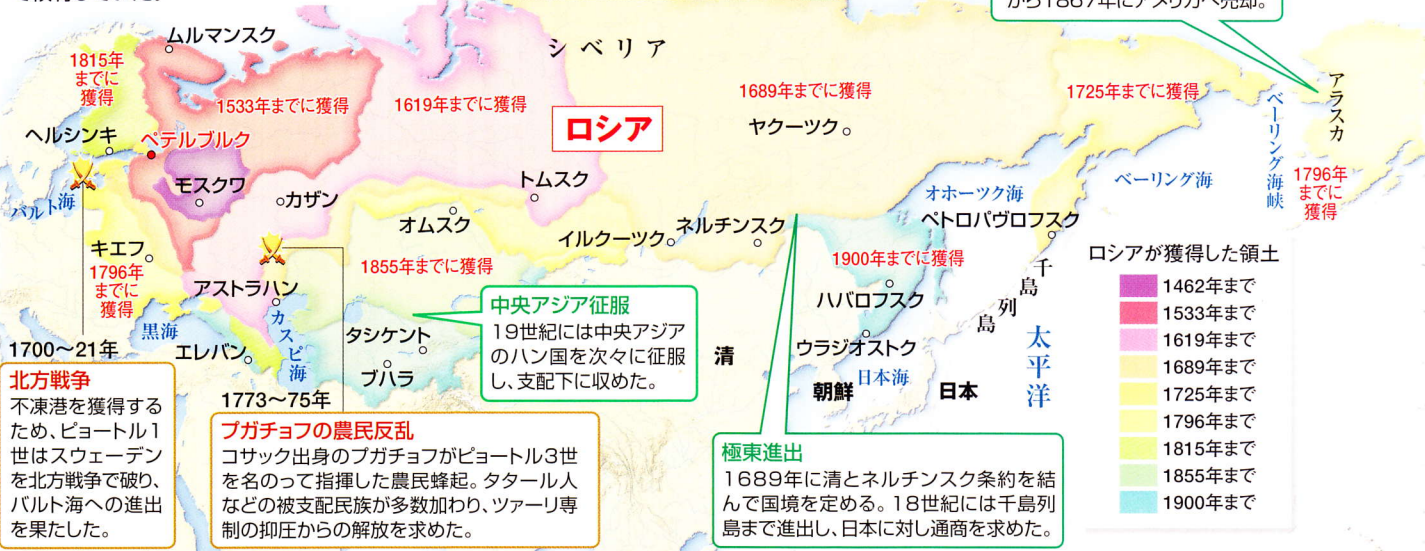
ロシアは17世紀以降、シベリアを征服して領土を飛躍的に拡大。一時は北米のアラスカまで領有していた。

シベリア征服

イヴァン4世はコサックの首領イェルマークを使ってシベリア西部を征服。ピョートル1世の時代にはベーリング海峡まで到達した。

アラスカ

ピョートル1世に雇われたデンマーク人ベーリングが発見。毛皮貿易などで繁栄したが、財政難から1867年にアメリカへ売却。



中央アジア征服

19世紀には中央アジアのハン国を次々に征服し、支配下に収めた。

極東進出

1689年に清とネルチンスク条約を結んで国境を定める。18世紀には千島列島まで進出し、日本に対し通商を求めた。

- ロシアが獲得した領土
- 1462年まで
 - 1533年まで
 - 1619年まで
 - 1689年まで
 - 1725年まで
 - 1796年まで
 - 1815年まで
 - 1855年まで
 - 1900年まで